



神聖かまってちゃんとブシロード

———神かまが批評家・ライターから無視されてる理由

「すべてのジャンルはマニアが潰す」

これはトレーディングカードを手がけるブシロードの社長がいったことばである。

いまのロックシーンがまさにそうになっている。ミュージシャン自身が音楽マニア・オタク化しているのだ。ミュージシャンが同業者を評価するのはいい。だが、そちらを向いて格好ばかり付けて、こちらリスナー側をみていないような気がしてしまう。

このような現象はさまざまある。

例えば、明石家さんま（一九五五～）は最近の若手芸人と違って、「芸人の評価」をあまり気にしない。これは、さんまだけでなく、さんま以前の芸人は、みんなそうだ。でも、さんまより後の芸人であるダウンタウン、さまーず以後、たとえばくりいむしちゅーや雨上がり決死隊や若手の芸人たちは、一般視聴者からの人気よりも、芸人間の評価を気にしている気がする。

業界内の評価としてのひとつの物差しと考えるのならいい。しかし、芸人自身が芸人間の評価を「正しい評価」と思って、その正しさを一般客にも解らせようとしてしまう。「俺たちはわかってる」という態度をとったり、客に向かって説明しようとしたり。

これはオタクがするアニメの見方とかなり似ていると指摘しているのがオタキングである岡田斗司夫だ。

彼はこういっている。

ひと昔前、アニメといのはもともと「テレビまんが」と呼ばれていて、子供のみるものだった。大人のおじさんたちが子供用に作っていた。やがて子供だけじゃなく大人もアニメを見るようになってくると、後にオタクと呼ばれる人種が発生した。オタクは単なるファンもいるし、アニメ関係者や絵描き、漫画家や同業者など近い立場の人も多く含まれるようになった。そういう人たちの評価が、次の作品作りに反映されるようになってくる。



時代的には『超時空要塞マクロス』以降のアニメがそれに該当するという。

単に視聴者に人気があるか、視聴率がとれるか、ビデオやおもちゃが売れたかということよりも、アニメファンがどう捉えたかが大切にされるようになった。

そのアニメファンの中でも、よりわかっているマニアたちにはどう評価されたか、アニメ誌の編集者や批評家にはどう受け止められたか。同じアニメを作っている人にはどう見えたか。アニメ界にいつのまにか「評価のピラミッド構造」ができて、そういうマニアの意見が作り手を左右するほどになった。

結果、徐々にアニメはオタクだけを対象にしたものが増えていった。深夜のテレビで放送して、DVDボックスを売って制作費を取り返す、というビジネスモデルが当たり前のようになった。

昔とくらべてアニメの劇場作品はおどろくほど多くなり、これは劇場で公開しても黒字として資金を回収できるくらい消費者が増えているということである。それでも、最近ではアニメの行き詰まりが指摘されているという。

さらに他の例だと少女マンガがあると岡田斗司夫はいう。

かれ曰く、少女マンガは80年代に一度減びているという。60年代は10歳前後の文字通り少女が読書ターゲットだった少女マンガだったが、しだいに絵柄が大人っぽくなり、主人公の年齢があがり、内容も崇高になっていった。70年代にはふつうの少女が読んでも分からない難解な少女マンガがどんどん増えていったという。

高度な精神世界や、読み手にスキルを要求する画面など、どんどん内容も読者対象も高度化した。結果としてふつうの少女たちは少女マンガを「なんかむずかしくってうっとおしい」と避けるようになり、少女マンガ誌は増えるんだけど少女の読者は減る、というおかしな現象が起きてしまった。

こんな状態を一旦リセットしたのが『ちびまる子ちゃん』（1990）や『セーラーMoon』の大ヒットだという。『りぼん』や『なかよし』全盛時代の対象年齢に戻ることで、ようやく少女マンガは息を吹き返すことができた。



どんなジャンルでもオタクとプロが渾然一体となりながら、あるジャンルを牽引している初期の時代は、とてもエキサイティングで面白くてしょうがない。弾がその進化を同時代的に学んでいける時期だから、教養を身につける必要もないのだ。

やがて、内容がじょじょに高度に進化していく。高度で先鋭的な作品が次々と生まれ、オタクにとってはまだまだ至福な時である。

しかし、それは同時に学ぶべき教養が寛大になってしまうということでもある。すると新しく入ってきた人たちは、すでに作られてしまっているそれぞれの段階を一気に学ばなければならなくなってしまう。迎える側は、わかって当然という態度になってしまう。後からそこに入っていくとすると、かなりの修行が必要となる。彼らにとっては、重要度や年代順ではなく、すべての作品が並列的に見えるのだ。

興味をもって参入しようと思った子は、そんな作品をいちいち勉強しろといわれても困ってしまう。そういうふうに触れてしまうと「これは《わたしのもの》ではない」と思って、敬遠してしまう。

これが素晴らしいこれが凄いこれを見ろ、と偉そうにドヤ顔でいうならば初心者は白けてしまう。

これらは今のロックシーンにも当てはまる。

新しいバンドはどんどん出てくるにも関わらず、むつかしい（むつかしそうな）バンドが多い。たとえば、サカナクションである。彼らはもっとディープにいかうと思えばいけるが、マニアックすぎないように相当気をつけてハードルを落としているように見える。それでも、彼らのインテリで芸術感のある波動はわたしのような世の中びくびくしながら歩いているような存在のクソボンクラからしたらハードルが高い。

かといって、SEKAI NO OWARIだとむつかしくないが、きっと彼らSEKAI NO OWARIのファンはSEKAI NO OWARIを聴いて他のロックバンドを聴こうとは思わないだろう。

今の時代はもう断絶しまくっているなのでこれは仕方ない。でも、仕方ないで片付けてしまうのは面白くない。





たとえば、現代の10代にとってロックシーンは魅力的なものに映っていないのかもしれない。しかし、その代わりにボーカロイドが彼らの心を掴んだ（じっさいそれに傾倒できたのはごく一部ではあるだろう）。

ボーカロイドは新しいものだった。上から説教する人間がいなかった。教養をひつようとせず、むつかしくなかったのだ。

神聖かまってちゃんは今のロックシーンにいるバンドたちのように難解ではない。彼らは他のバンドに評価されることを望んでいない。おれたちこそ評価されるべきだ！とは思っているだろうが。

彼らが望んでいるのは10代のまだロックに触れていないような少年少女たちに聴いてもらうことである。だから、インターネットをつかって、ニコニコ動画で自身の配信を行う。彼らは10代の少年少女がいま集まっているところへ降りているのだ。

ロックンロールはそもそもだれのためにあるかといえば10代の少年少女である。そもそも20代から上の支持なんていうのはまったく信用できない。20代の多くは音楽をファッションで使ってしまう。それはどんな音楽好きでもそうだろう。歳をとってどんどん出てくる自分より年下のバンドに毎度毎度いちいち心にイナズマを打たれている人間なんて信用できない。自分が最初に心打たれたものが心に最高点としてのこっているものだからだ。



たとえば、萩原朔太郎はこうしている。「人間は成長しない。明日の自分が今日の自分より優れているなんてありえない。人間は《成長》するのではなく《変化》するのだ」という。

10代の頃に心刻まれたものこそ人間のなかに残っていく。20代から始まる自分のなかの流行り、マイブームとしてではなく、自分の人格に刻まれたものになる。

偉らそうな批評家や音楽フリークやマニアに一時的・文脈的に評価されるよりも、10代にロックを刻み込んで少年少女らの心のよりどころとして一生自分の楽曲があるのならばそれは最高の価値だ。なぜなら、批評家はそれを生き方として刻まないが、10代の少年少女はそれを生き方として心に刻みつける。

体験者か未体験者かどちらが深く表現を心に刻み込むのかといえば、未体験者である。

神聖かまってちゃんはロック界隈から浮いている。それでいい。浮いてないロックバンドなんて果たして価値があるのか。



業界や身内たちではなく、10代にロックンロールをあてようとしているのが神聖かまってちゃんだ。彼らがいるから日本のロックはギリギリ生きている。しかし、これは延命だ。の子曰く、いまのロックシーンは死体の流れる川である。なので、おなじような姿勢のロックバンドがまだまだ新しく出てこなければいけない。

ロックンロールを少年少女の手のなかに取り戻し、ロックを再生させるバドンをもっているのは神聖かまってちゃんだ。←

うおお

神聖かまってちゃんとブシロード ーーーかまってちゃんが批評家・ライター  
から無視されてる理由

電子書籍プラットフォーム：ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ